

# 東奈良



1976

東奈良遺跡調査会

## 序

茨木市には、数多くの埋蔵文化財がありますが、最近の都市開発などの建設工事に伴いこれまでに幾つかの遺跡の発掘調査を行ってきました。

とくに、当市街地の南、阪急電車南茨木駅周辺を中心とした東奈良遺跡は、昭和46年に東奈良遺跡調査会の発足とともに本格的な調査にのり出し、次々と計画される建築工事におわれながら以後5年経った今も調査を続行中であります。

これまでの調査の結果、東奈良遺跡は、弥生時代から室町時代まで至る複合遺跡であり、数多くの遺構、遺物が検出されました。なかでも、昭和48年11月に発見された銅鐸の鋳型、の破片、さらに翌年の9月にほぼ完形の銅鐸の鋳型等が発見されたことは、茨木のこの地が古代から何らかの形で重要な位置を示していたことの証明でもあります。

本書（パンフレット）は、古代の生活を東奈良遺跡をとおして考え、当遺跡から出土した若干の遺構・遺物の紹介であります。

昭和51年10月

東奈良遺跡調査会理事長 小野耕五郎

## 本文目次

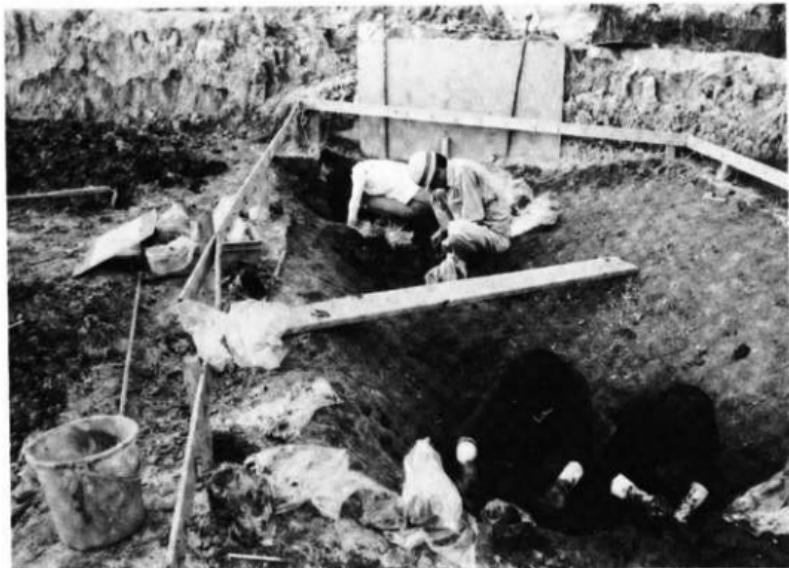
埋蔵文化財.....	1
I 東奈良遺跡とその周囲の環境	
1. 地理的環境.....	2
II 東奈良遺跡の歴史的環境	
1. 人類のはじまり.....	5
2. 上器のはじまり.....	5
3. 稲作のはじまり.....	7
4. 国家統一のはじまり.....	10
5. 律令国家のはじまり.....	12
III 東奈良遺跡の発掘調査経過.....	15
IV 東奈良遺跡の遺構	
墓	
1. 方形周溝墓.....	16
2. 木棺墓.....	18
3. 瓦棺・壺棺墓.....	19
4. 土壙墓.....	20
集落	
1. 型穴式住居址.....	21
2. 植立柱建物址.....	22
3. 井戸.....	23
4. 溝.....	24
5. 貯藏穴.....	25
6. 木製品を入れた大形土壙.....	25
V 遺物	
上器	
1. 弥生式土器.....	26
2. 土師器.....	29
3. 須恵器.....	31
4. 瓦器.....	32
石器	
1. 石包丁.....	32
2. 石斧.....	33
3. 石鎌.....	33
4. 石槍.....	33
5. 石戈.....	33
木製品	
1. 農耕具.....	34
2. 工具.....	34
3. 他の木製品.....	34
銅鐸・銅戈、勾玉の鋳型と関連遺物.....	36
年表.....	38

## 埋蔵文化財

今年で東奈良遺跡調査会が発足して以来6年になりました。ここにその成果をみなさんに御覧いただき、埋蔵文化財の大切さを少しでも御理解いただきたく思い、小冊子を刊行することになりました。

埋蔵文化財といわれる文化財を対称として調査を進めている東奈良遺跡調査会のメンバーならびに古学に従事する者にとっては、埋蔵文化財は単なる研究対象のみではない。文化財のもつている意義はもっと深い、まして、骨董品でも美術品でもなく、小数の人々の個人所有物では毛頭ない。人間の歴史の証しなのである。人間がこの地球上に誕生して以来培ってきた大樹の巨大な根なのである。現代の我々は、この大樹の頂上に生きているが、成長が止まっているのではない。もっと大きく根を張り、成長させてやらなければならない、未来に向って。過去はすぎ去ったものであっても消し去ることはできない。今日がある以上、そして未来のためにも、巨大な木の根となった古代の人々の生活記録がここにあるのです。

現代我々が生活している大地の下に生きながらえている埋蔵文化財は、現代人の生活を維持せんがための新陳代謝として消え去っている。これも歴史の流れであろう。しかし、いつも簡単に消え去り、忘れ去るのではなく、それを生きかえらしてやろうとするのが、考古学に従事するものと、現代の人々の責任ではないでしょうか。根のない木は育たないのです。



発掘状況

## I 東奈良遺跡とその周囲の環境

### 1. 地理的環境

東奈良遺跡は、大阪府北東部三島平野の南西部にあり、現在の茨木市東奈良、奈良、天王、沢良宜一帯に位置しています。

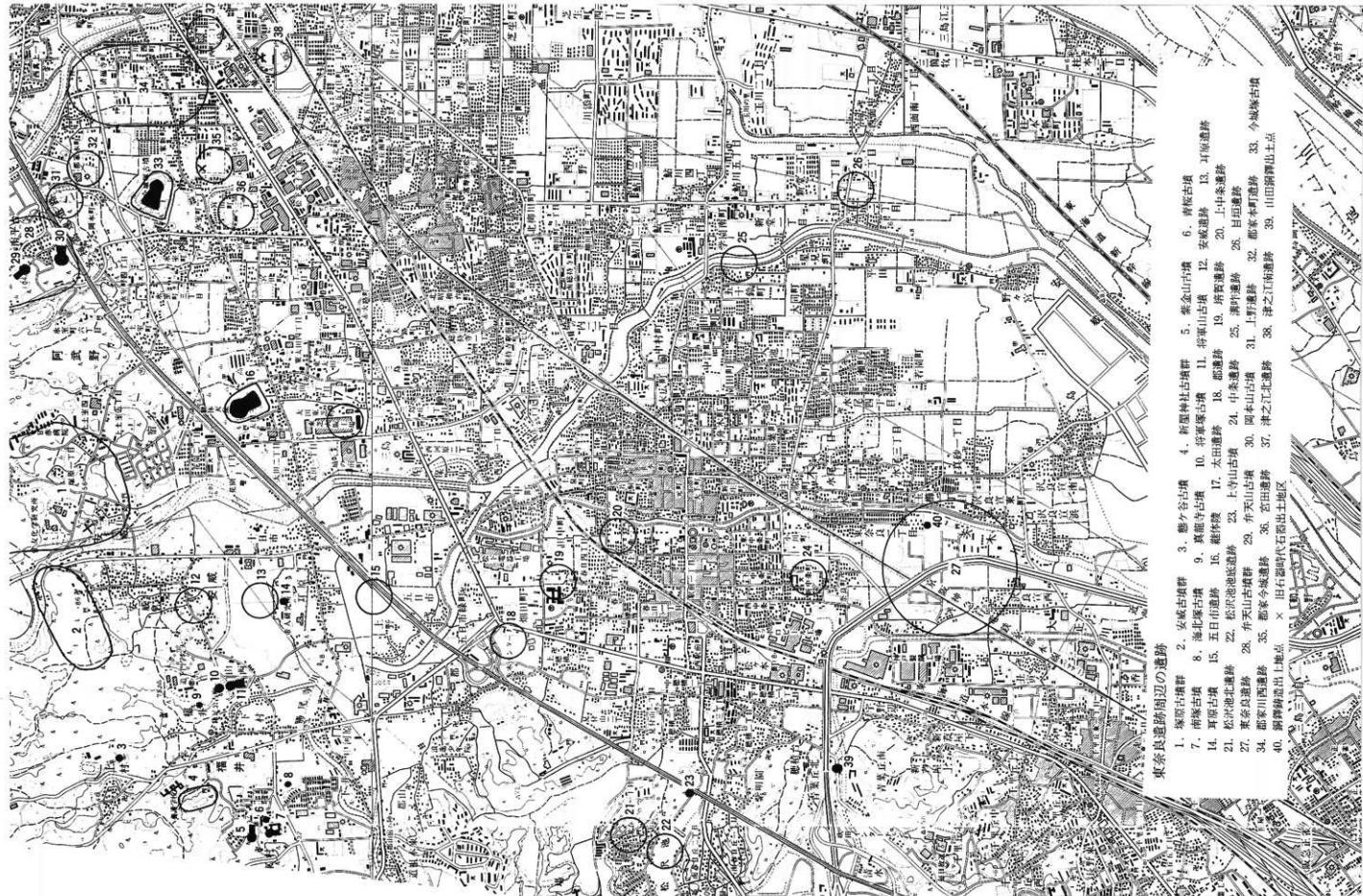
付近の地形は、北に老ノ坂山地が東西に連なり、西には標高80m前後の千里丘陵が広がり、三島平野の北から西側を囲こんでいます。南は淀川をはさんで河内平野、生駒山地が広がっており、北東は、京都盆地へ連なっている。

北の山地に源を発する安威川、佐保川、勝尾寺川が北から南へ縱走し、近江、山城、大和から源を発する大河川、淀川と連なって大阪湾にそいでいます。これらの河川によって、今から約1万年前より運ばれた土砂は、山地、台地のすそに広がる底地を埋めてゆき、広大な平野を形成してきました。これが沖積地といい、三島平野となりました。

これらの河川に恵まれ、広大な平野をもち自然の要壁に囲まれ、気候風土に恵まれたこの地は古代より活発な人類活動が行なわれた地域であった。



東奈良遺跡の近況



東奈良遺跡附近の地図

1. 塚原古墳群
2. 佐波古墳群
3. 鹿ケ谷古墳
4. 新園神社古墳群
5. 犬金山古墳
6. 青峰山古墳
7. 南條古墳
8. 海北古墳
9. 真鍋古墳
10. 寺原冢古墳
11. 年率山古墳
12. 安坂山古墳
13. 丹波古墳
14. 耳原古墳
15. 五日山古墳
16. 錦糸古墳
17. 大井古墳
18. 那須古墳
19. 沼田古墳
20. 上中条古墳
21. 松沢山古墳
22. 松沢山古墳
23. 上山古墳
24. 中条古墳
25. 濱作古墳
26. 田尻古墳
27. 三日月古墳
28. 葉余良遺跡
29. 伊天山古墳群
30. 国本山古墳
31. 上野古墳
32. 鶴巣本町古墳
33. 今城塚古墳
34. 郡川西古墳
35. 鶴巣今城塚
36. 宮田古墳
37. 井之口古墳
38. 泽ノ上古墳
39. 田山狩古墳
40. 錦糸山古墳

## II 東奈良遺跡の歴史的環境

### 1. 人類のはじまり（旧石器時代）

人類といわれるものが、この地球上に誕生して以来約200万年といわれています。この頃活動していた人類は、猿人、原人、旧人といわれています。現在の人間と同一のものは新人と呼ばれ、今より3万年前よりあらわれたものです。これらの人類が活動した時期を旧石器時代と呼ばれ、日本においては十数万年前より1万年前の長期にわたって続きました。この時代は、狩猟採集生活を行っており、定住することなく、獲物を追っての移動生活を行い、道具といつても石で作った石器のみであった。当然このような生活の為、人類の数も少くなく、彼らが残したものは、さきの石器しかなく、それより彼らの生活を考えるのみである。

東奈良遺跡付近においては、この時期の遺跡は非常に少くなく、茨木市太田、高槻市塙原、津之江南遺跡などより、少量の後期旧石器時代の石器が検出されている。しかし、造構は検出されていない。この時期は、まだ沖積地形成以前であり、前後4回にわたる氷河期が起こり、その間に間氷期といわれる暖い時期があった。この長年にわたる気候変化のくり返しによって海面が上昇したり下降し、日本列島は大陸より離れた。この時期には、大小さまざまな動物が山野に住み、多種の植物が咲き、それを追って人間が生活をはじめた時期であった。このため、当時の生活圏は、山間地と台地であり、遺物もこのような地より多く発見されている。東奈良遺跡の付近一帯は、狩猟採集生活に的していないのか、遺物の発見例は少ないが、近年山間地の調査が進むにつれて逐次増える可能性はある。人類の歴史は、99%がこの未開の時代であることを忘れてはならない。

### 2. 土器のはじまり（縄文時代）

今より約10000年前に、日本において土をねり、器を作りそれを焼いて土器を作る時代がはじまつた。これが縄文時代（縄文式土器を使った時代）と呼んでいます。

縄文時代は、紀元前8000年頃から紀元前300年頃まで続いた、その間を草創期、草期、前期、中期、後期、晚期の6時期に土器によって別けている。

この時代は、さきの旧石器時代と同じく狩猟・採集生活に変りはないが、技術面で向上し土器と共に、道具として弓矢が出現し、狩猟動物が増え、角骨などを利用したつりばり、もりなども作られた。また土器による食物の貯蔵、煮沸、焼くなどの方法により、今まで食られなかつたものを食物として取るようになり、食生活は旧石器時代に比較し安定してきた。彼らは、竪穴式住居址をつくり、集団化し、集落も作られはじめた。特に中期頃には、この集団化が大形化し、竪穴式住居址も建て直しを行い定住化が観られるようになる。集落に伴い墓地が作られたが、その多くは上塚を掘り埋葬する上塚であり、その中には屏風、小児の壇棺葬なども観られるようになり死者に対する変化が起つてきただ。このように、遺跡からは旧石器時代に比べて、技術も向上し、安定化が観られるようであるが、食生活に関しては、依然自然の恵みに依存した生活には変りがなく、不安は隠すことはできなかった。この状態は当時の遺物によく表れており、土器に描かれた文様、土偶、土面、上版、石棒などがあげられる。

東奈良遺跡付近の縄文時代の遺跡は非常に少なく、断片的な遺物が発見された茨木市初田、高槻市の柱本、安満、宮田などのみである。淀川を越えた生駒山麓においては、国府(藤井寺市)、繩手・小坂・馬場川(東大阪府)、神宮寺(交野市)、穂谷(牧方市)などで発見されている。

いづれにしても、この時代の遺跡は東日本に比べて西日本は少なく、自然環境(動物、植物などの食料源)に恵まれていなかったと考えられる。

9000年間近く続いた縄文時代も、長年の間に気候地形も変化し、自然依存のみの生活では行き詰まってきた。特に西日本においては、狩猟採集生活に限界をきたし、食物を生産して新しい時代へと変わっていくのである。



縄文時代の生活

### 3. 稲作のはじまり（弥生時代）

今から約2200年前に、大陸より朝鮮半島を経て、九州の海岸地帯に稻と金属文化をもった人々が渡ってきました。縄文時代の狩猟採集生活に行きづった西日本に急速に広まっています。これが生産文化のはじまりである弥生時代と呼ばれる時代です。

弥生時代は、紀元前300年頃から紀元後300年頃まで続き、同じく土器によって、畿内においては、第Ⅰ様式～第V様式の5期に分けられています。

弥生時代の特徴は、第1点は、稻作による生産、経済文化である。第2点は、金属器（鉄・青銅器）の使用をはじめた。第3点は、第1・2点を総合して、社会体制の変化としての階級社会出現の基礎が形成された時代である。

水稻に代表される弥生時代においては、この時代の文化、生活がすべて水稻に関連していました。生活地は、水稻耕作に適した水の豊かな低湿地へ耕作地を求め、住いはその近くの微高地、台地に定住するようになりました。工具類に關しても、今までになかった農工具が、豊かな木材資源を利用して多量に作られ、それを生産する石器類も、石斧（蛤刃・柱状・扁平片刃のみ形etc.）が発達した。また石包丁と呼ばれる稲穂を刈り取る道具、時代が下がると石鎌も出現してきた。土器にも変化が観られ、収穫物の貯蔵用の壺・甕・煮沸用の甕・瓶・鉢・盛り付け用の高杯の出現が観られる。年間の生活も、もちろん稻作を中心として回りました。冬・春は、農具の生産補修、水田の準備を行い、夏は水田に水を入れ、モミを直にまいた。秋は、石包丁で稲穂から摘みとる。稲穂は束ねて、壺や高床式倉庫に保存した。そして、神に来年の豊作をいのるといった生活パターンが繰り返された。

金属器（鉄・青銅）の導入により、農耕具の強度をひやく的に増大させ、弥生時代中頃から観られた山間地、台地への水田地の拡大（広汎）化は、この金属を付けた農具によって水路を掘り水を引いたために可能に成らしめたことと考えられる。さらに、道具を作る道具としての鉄器類の普及により、道具（特に農耕具）の加工技術が向上し、また弥生時代になってあらわされた木製の容器（高杯・匙・杓子など）の加工には、石器では観られない精巧な仕上げがなされており鉄器工具の存在が考えられる。日本においては青銅器と鉄器が同時に共存しており、また石器も多量に使用されている点は、大陸（オリエント・中国）に観られない文化形態をもっている。これは当時の日本が文化の辺境地としての存在であり、大陸で鉄器が使用された時期に、日本にこの両方の文化が渡來した点にある。しかし、同時にきた青銅器、鉄器には使い分けが観られ、青銅器は劍・矛・戈の武器、宝器また銅鏡などの儀器に対して、鉄器は、生産用具（工具・道具類）・武器のみに使用されていた。この中の宝器・儀器と呼ばれるものは、銅劍・矛・戈にみられる武器としての威厳に対する信仰としての宝器・銅鏡の形態・音色による神に対する農耕神事としての儀器として使用されたものです。

これら稻作のもたらした生産社会は、人々の社会体制にも変化が生じた。稻作農耕は、多人数による集団作業を必要とした。つまり、水田地の開発に必要な水路、畦の設置、水田地の補修、

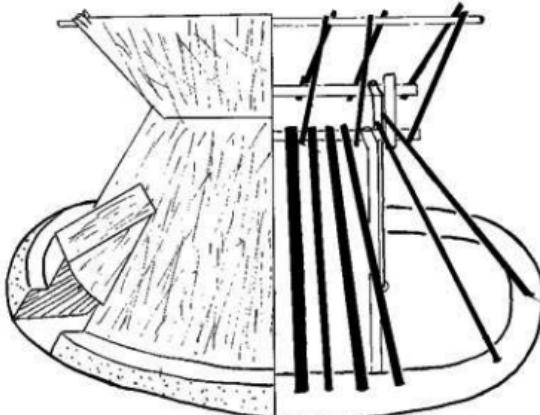
モミまきの準備、モミまき、稲穂の刈り取りといった作業が気候を追って規則正しく行う作業を必要とした。この規則正しい集団作業の中に、指導者は自然に出現した。彼は、長として農耕儀礼も司る経験豊かな人であったと思われる。稻作が定着し、豊かな生産をあたえて、余剰もでき蓄積も可能となり、より多くの水田を開発し、生産性の高い土地をもつものは、他のものより、富と権力をもつようになり、人々間・集団間の格差が生まれてきた。これらの小集団間の格差は、弱小集団を強大集団が統合してゆき、より大きな集団が出現し、その長はより大きな富と力をもつようになっていった。この格差は、墓地などに観られ、方形周溝墓に埋葬されるものと土墳墓に埋葬された者が別けられている点に観られる。また集団間の格差による抗争が弥生時代中期頃、武器としての石器（石鎌・石槍など）が増大し、軍事的性格をもつ高地性集落が出現してきた。これは、中国の史書にも書かれており、倭国大乱の時代が起きた。

これらの遺物、遺構が示すように、抗争がくり返えされ、統合され、古墳時代へと移っていく。

東奈良遺跡においては、この弥生時代中期前半（第Ⅱ様式）頃より生活がはじまると今の所考えられている。古代の遺構面は標高7m～5mといった低湿地に存在する当遺跡は、稻作に的していたと考えられ、特に弥生時代中期から古墳時代前期にかけて、著しい発展が観られ、この間の遺構・遺物が現在の所もっとも多数検出されている。

また、周囲にもたくさんの遺跡があり、茨木市の中条・郡・耳原・安威・五日市・上中条・太田・溝呬・目垣などの弥生時代前期から弥生時代後期さらに古墳・歴史時代の遺跡が検出されている。高槻市の安満・古曾部・郡家・宮田・天神山・紅葉山・芝谷遺跡、河内・和泉・山城地方にも多数の弥生時代の遺跡が検出されており、前時代（縄文時代）に比べて莫大に増え、弥生時代の先進地域として発展していった様子が、これらの遺跡の遺構遺物に観られるようになる。この優位性が、後の古墳時代の中心地となり、国家統一への導因となつた。

弥生時代は、わずか500～600年の間に今の日本の基礎を築いた時代であり、稻作を中心とした文化は現在も続いているのです。



竪穴住居の復元図



弥生時代の生活

#### 4. 国家統一のはじまり（古墳時代）

弥生時代においてちかわれた生産力の向上による富の蓄積は、村々の抗争を生み、強い者は村々を統一し、小国家を形成し、さらに小国家間が抗争し統一されていく争乱期(倭國の大乱)があった。3世紀中頃この争乱を掌握した国が女王卑弥呼の邪馬台国である。これらの資料は、中国の史書によるものが多く、考古学的には、以然まとまっているのが現状である。その後、中国の史書の日本の記録に關しては、130年間の空白が詰くが4世紀中頃に日本から朝鮮へ出兵しており、この間に日本は國家統一されていたと思われる。このように争乱期をへて国家統一から律令体制が完成するまでの時代を古墳時代といい、A.D.3世紀中頃より7世紀まで続いた。

古墳時代とは、古墳と呼ばれる墳墓を作っていた時代をさす。古墳とは、単なる墓ではなく、今までに観られなかった非常に大規模な墓をさす。また古墳が単なる巨大な墓だけではなく、それほどの墓を作ることに大きな意味があり、埋葬される人の権力、富の象徴であり、その権力、富を受け継ぐ者の力の誇示でもあった。

古墳時代のはじまり、終りについては、考古学的にも意見がまとまっているが、古墳の変遷により、前・中・後期に別けられている。

古墳は、外形から觀られる壮大さのみでなく、墳墓内の墓室、棺、副葬品も多く歴史遺産の集合体でもある。

古墳には、外形より前方後円墳、円墳、方墳、双円墳、帆立貝式古墳などがある。また内部主体、つまり埋葬施設にも竪穴式石室、横穴石室、石室のない粘土櫛があり、遺体を入れる棺にも、木棺(割り竹形・組み合せ・舟形)、石棺(長持ち形・組み合せ・割り竹形・舟形)、陶棺、埴輪円筒棺がある。これらが、時代・地域差により変遷していた。副葬品と呼ばれる死者が生前に使用したもの、あるいは供獻されたものにも多種あり、鏡・菱身具・刀・十器・甲冑・馬具・農耕具があげられる。これらも時代・地域差・思想変化によって移り變る。また、古墳の外形をかぎったり、上砂の流失を防ぐ役目をした埴輪の中には、当時の文化を表現した形象埴輪があり、重要な遺物の一つである。

このように古墳は、非常に多くの遺構、遺物を含むものであるが、その陰にかくれた人間の生活があり文化があった。前時代の文化形態と同一ではあるが、支配者の出現により専門工人(墓を作る人、埴輪を作る人、須恵器を作る人、棺を作る人など)集団が作られ、支配者の統率下に置かれた。また、稻作に必要な水田の開発は、生産力の増大であり、権力の掌握であったために活発に進められ、5世紀になると人工の灌漑水路を作るという大規模な工事が行なわれた。たとえば古市の大溝、すでに3世紀頃に作られたと考えられている東奈良遺跡の大溝などがあげられる。これら古墳を含む大工事が可能になったのは、支配者の権力による統率力と土木用具や農具に鉄製品が使われるようになったためである。

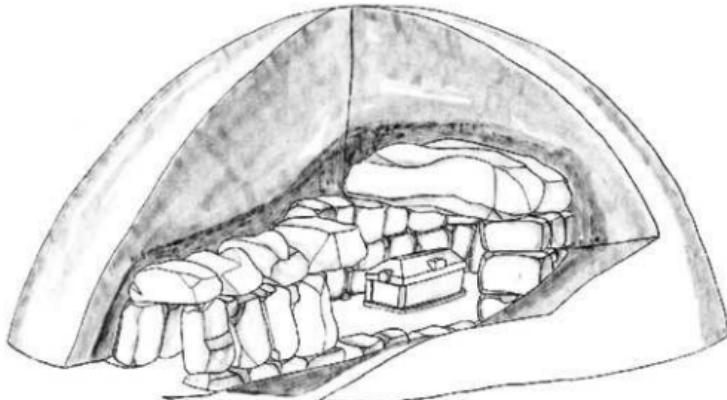
住いは前時代と同じく竪穴式住居址であったが、豪族(首長)は、家形埴輪の家屋文鏡から、高床の屋根をもつ住居や倉庫をまとめた館に庶民とは異った所に住んでいたと考えられている。

この古墳時代も、天皇間の争いや地方豪族の反乱、また中央高官などの争いといったより整った政活統合（律令体制）形成のための葛藤をくりかえし、選り別けられ、天皇を中心とした豪族（貴族）によって中国（隋・唐）より学んだ法を作り、官制をひき支配体制を強化していく。また、6世紀に大陸より仏教が伝わり、古墳造営にも影響し、変りに寺院建築にその力をそそぎ、飛鳥文化が栄えた。そして、646年（大化2年）に大化薄葬令が出され、古墳を作ることにきびしい規約が施行され、古墳の築造は衰退していき、奈良時代へと変わっていく。

東奈良遺跡もまた弥生時代に続いて古墳時代の遺構遺物が検出されており、特に弥生時代から古墳時代への過渡期の遺構遺物が多数検出されている。東奈良遺跡に限らず、弥生時代の遺跡の存在する所は古墳時代へも続いており、一部の遺跡以外は古墳時代の遺構、遺物が検出されている。

古墳としては、茨木市の紫金山古墳・将軍山古墳の前期・前方後円墳、中期の三島藍野陵といった巨大な台地上の前方後円墳、後期の南塚・耳原・海北塚・青松古墳といった大形横穴石室をもつ前方後円墳、円墳、同じく安威古墳群、新屋古墳群、郡古墳群といった群集墳があり、高槻市の多数の古墳とともに北摂津の一大古墳群が存在している。

しかし、「大化の薄葬令」施行以後、古墳の築造はへり、茨木市・高槻市においても、古墳は後期の群集墳以後築造されなくなり、わずかに茨木市の初円1号墳、上寺山古墳（火葬墓）、高槻市阿部山古墳のみである。



古墳時代後期の横穴石室の円墳

## 5. 律令国家のはじまり（奈良時代）

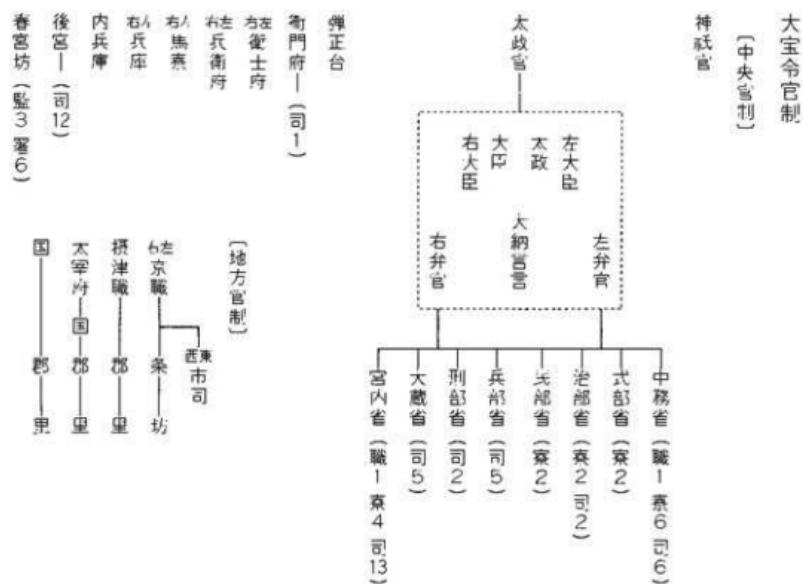
710年に都は、中國(吉)の都長安にならって制定された平城京に遷都された。平城京内には、平城宮といわれる天皇を中心とする少数貴族による政の中心地の大内殿を作りあげた。これほどの都を築らしめたのは專制国家体制により、100人たらずの貴族が500～600万人の国民を支配したおかげである。

この支配体制は、大宝律令により中央官制が施され、国民はこの体制内に入り、農民も戸籍に登録され、土地が班ち与えられて強制的に税を取られる時代がはじまった。

中央体制にともない、地方官制も施され、現代の茨木市は島下郡に入り、茨木市郡に郡の役所が築られ、この地の豪族を郡司に任命し、この地方を統轄させた。

以上、東奈良遺跡の周囲の環境を歴史の流れを追って簡単に記述した。

### 大宝律令下の官制





### III 東奈良遺跡の発掘調査経過

昭和46年4月に、茨木市東奈良2丁目の小川水路改修工事中に、地下約1.7mの黒色粘土層中より、多量の遺物（弥生式土器・須恵器・石器・銅鐸）が検出された。同年7月に、この付近に阪急電鉄株式会社が大規模なマンション建設計画があることから、大阪府と茨木市によって東奈良遺跡調査会が結成された。同年7月より茨木市における最初の本格的発掘調査が開始された。当初の調査では、水路と大形土壙、弥生時代から古墳時代の土器・農具・石器などが検出され、統一しての調査により、壇棺墓・掘立柱建物址などが検出され、改めて東奈良遺跡の重要性が認識された。

昭和47年11月からの調査により、古墳時代前期の竪穴式住居址・井戸・大溝、歴史時代の掘立柱建物址が検出され、他の遺跡ではあまりみられない弥生時代後期から古墳時代前期の遺構構造物が検出された。昭和48年5月には、弥生時代中期の方形周溝墓・上塙墓・上葬・石器・木器が検出され、この後弥生時代から古墳時代・歴史時代の遺構・遺物が検出されるようになり、東奈良遺跡が複合遺跡であることが判明した。

昭和48年11月より調査を開始した現場より、銅鐸の鋳型（溶范）の破片を検出し、昭和49年9月20日には、完形の鋳型（溶范）が検出された。それと共に、銅戈・勾玉の鋳型も検出され、一躍注目を集める遺跡になった。

東奈良遺跡は現在も発掘調査を進めており、昭和46年7月から昭和51年10月の間に大小39カ所、2.5万箇以上の大規模な発掘調査を行っています。

調査経過表

調査年度	主な検出遺構・遺物
46年	大形土壙・溝・壇棺墓
47年	掘立柱建物址群・壇棺墓・井戸・竪穴式住居址
48年	大溝・方形周溝墓・上塙墓・大形土壙・竪穴式住居址・井戸・掘立柱住居址・庄内式土器検出の溝・銅鐸の鋳型
49年	土塙墓群・井戸・竪穴式住居址・方形周溝墓・壇棺墓・掘立柱住居址・埴舟・完形の銅鐸鋳型
50年	掘立柱建物址・井戸・竪穴式住居址・方形周溝墓・木製品を入れる大形土壙
51年	貯藏穴・竪穴式住居址・井戸・溝

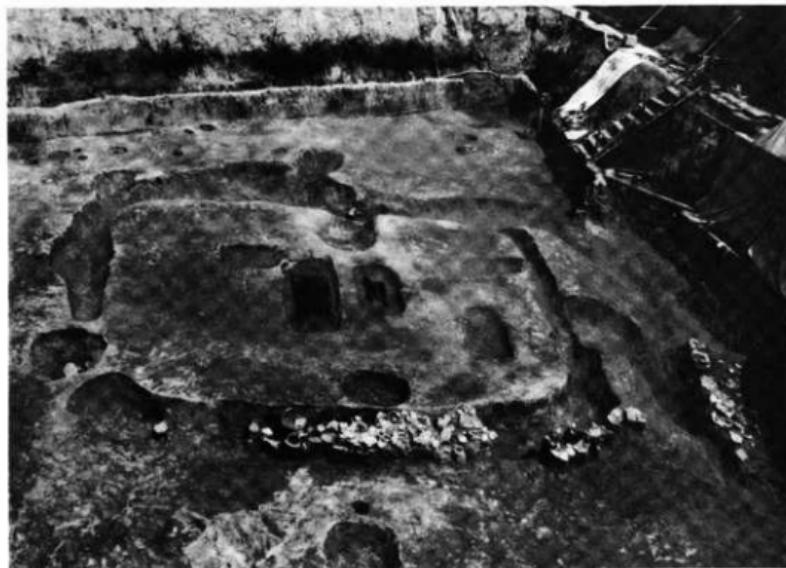
## IV 東奈良遺跡の遺構

### 墓

#### 1. 方形周溝墓

方形周溝墓とは、近年発見例が増えてきている弥生時代から古墳時代にかけての墓の一種である。弥生時代前期頃、畿内に発生し、中期には全国的に広まり、墓として今までにみられない形態を示すものとなった。

方形周溝墓は、四角に溝を回らし、その内部に土を盛り、土盛り中に埋葬施設を築いた墓である。形態、規模は、種々あり、溝が全廻しないものもある。土盛り（マウンド）は、当初その存在が疑問視されていたが、大阪府東大阪市瓜生堂遺跡より約1.5mの高さに土を盛ったものが発見され、また他の遺跡よりも検出され、方形周溝墓は土を盛った墓であることが判明した。内部の埋葬施設には、木棺墓・壺棺墓・甕棺墓・土壙墓があり、特に土壙墓が多く検出されているが、土壙墓の形態が木棺埋葬の可能な所から、木棺墓のものが多くあったことも考えられる。盛り土を削平を受けて残っているものが少ないと同様に埋葬施設の残りも悪く、今後の発掘によって資料が増大し、明確になると思われる。また、内部の埋葬施設は、1基といったものは少なく、多くが多数の遺体を埋葬しており、集団墓地の性格が強くあり、相当期間にわたって使われたも

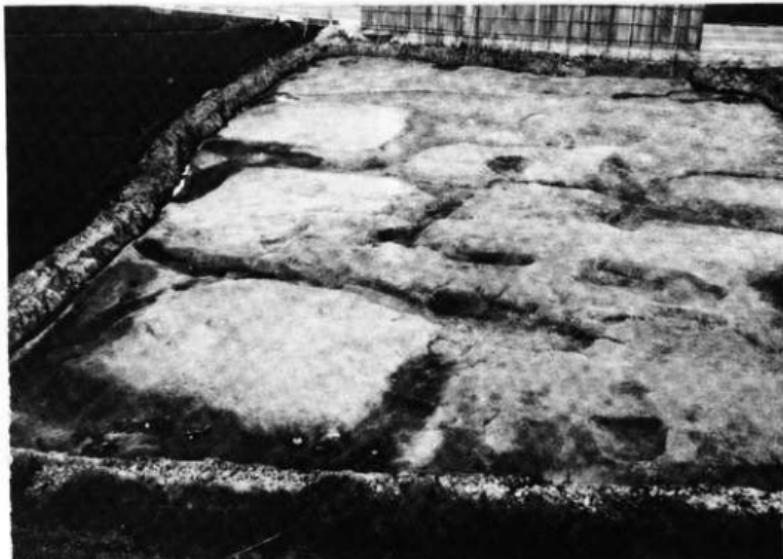


弥生時代中期の方形周溝墓

のと考えられる。さらにこの墓の特異な点は、周囲の溝、上盛りの部分に土器が供えられており、土器には、特に朱を塗たもの、意識的に穴をあけたものもあり、墓に供える土器としての性格が強く、供献土器と呼ばれている。

方形周溝墓は、単独に存在することは少なく群をして存在し、溝を共有して存在するものもある。また、周囲に土壙墓群を伴っている例も多くある。この関係から、方形周溝といわれる溝を掘り、土を盛るといった、今までにない労力を要し、また木棺・供献土器をもつ墓と、周囲の土壙墓と格差があり、社会体制に変化が観られてきたことを示している。

東奈良遺跡においては、現在19基の方形周溝墓が検出されている。この内埋葬施設を残すものは、4基あり、すべて木棺墓と土壙墓であった。また盛り土を残すものは1基のみで他は削平を受けて残っておらず、供献土器が検出されたものは2基のみであった。この中において、最も整った形で検出された1基は、弥生時代中期（第Ⅲ様式新の時期）のもので、規模は $8 \times 7$ mあり、約0.8mの盛り上がりが残っており、内部に2基の木棺墓、5基の土壙墓、溝内にも2基の土壙墓が検出された。周溝は全周せず、陸橋部があり、陸橋部に1基の土壙墓をもち、さらに周間に3基の土壙墓が検出されている。供献土器も盛り土上と、北・南の周溝より多數検出された。



弥生時代の方形周溝墓群

## 2. 木棺墓

木の棺を使った墓を木棺墓といいます。この形式の墓は、弥生時代中期から畿内を中心として発見されており、単独に存在するものもあるが、多くは方形周溝墓内より検出されている。しかし、木を使用していることから現在まで残っていないことが多い、時期・形態は定かでない。現在発見されているこの時代の木棺は、木板を組み合せた組合せ式木棺と呼ばれているものが多くある。

東奈良遺跡においては、前述の弥生時代中期から後期の方形周溝墓より、5基の木棺墓が検出された。すべて組み合せ式の木棺墓である。しかし、全容が検出されたものは少なく、ごく一部か底板のみであった。この内特異なものとして、弥生時代中期から後期と考えられている丸木舟・田舟を転用した組み合せ式木棺が2基検出されている。木棺の材料は、高野マキとよばれるものを使っており、この高野マキが取れる所が当時、和泉・紀伊地方に限られていることから、木棺材の交易も考えられている。



組み合せ木棺の底板



船を転用した木棺